

私たちは今、コロナ禍の苦しみの中におります。ただこの苦しみは普通の苦しみへの対処と違って、痛みの原因を取り去るとかではなく、今のところ基本的にはお互いに距離を置く、関わりをあまり持たないということが重要ということです。ですから具体的には教会の活動が取り止めとなったり、一緒に集まったりしなくなります。では今の苦しみに対して私たちは何をすれば良いのでしょうか？今日は苦しみについて聖書は何と語っているのか、そして今の苦しみに対して私たちがすべきことはなんであるのかということと共に考えてゆきたいと思います。

1. 信仰者は苦しみをどのように見るのか

災害が起こるたびに、「神がいるなら、なぜこんなひどいことが起こるのか。」「神が愛なら、なぜ人間が苦しむのを黙って見ているのか。」「神が全能なら、なぜ災害を食い止めないのか」などという声を聞きます。その気持ちが分からないわけではありませんが、そもそも私たちは、この世界が、神の定めた秩序の中にはなく、混乱の中にあるということを感じる必要があると思います。人間の作り出した社会、国家には、完全なものはどこにもありません。戦争、内乱、不正、差別、迫害はどこにでも見られます。人間は愛と正義において進歩してきたかと思えばまた逆戻りしています。物質的には豊かになり、科学技術は進歩し、便利になりました。しかし、その便利さが人の心を蝕み、私たちはストレスいっぱいの生活をしています。いつの時代も、自然の災害に、国と国との争いに、社会の不正に、家族の問題に、そして自分自身の内面にある罪に苦しんできました。そして神は、そうした人々の苦しみを知っていてくださり、その苦しみから人々を救おうと、常に手を差し伸べてくださいました。

旧約時代、ご自分の民として選んだイスラエルが、神から離れ、苦しみに陥ったとき、神は彼らに手を差し伸べられました。「わたしは、反逆の民、自分の思いに従って良くない道を歩む者たちに、一日中、わたしの手を差し伸べた。」イザヤ 65:2 とあるとおりです。それなのに、イスラエルは神に逆らい続け、その呼びかけに耳をふさいだのです。イスラエルがアッシリヤやバビロンに滅ぼされたとき、外国の人々は、イスラエルの神には自分の民を救う力がなかったのだと物笑いにし、イスラエルの人々自身も神の愛を疑いました。しかし、そうしたことが起こったのは神にイスラエルを救う力が無かったからでも、神がイスラエルを救おうとしなかったからでもありませんでした。「なぜ、わたしが来たとき、だれもおらず、わたしが呼んだのに、だれも答えなかったのか。わたしの手が短くて贖うことができないのか。わたしには救い出す力がないと言うのか。」イザヤ 50:2 神は人を救うためにさまざまな仕方でもその手を差し伸ばしていただきます。警告を与えて下さっています。私たちが神に向かって信仰の手を差し出すなら、神がその手を握りしめて救ってくださるのです。

「そんなことを今更言われても」とためらう必要はありません。神に助けを求めるのに遅すぎることはありません。神は言われます。「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。」詩篇 50:15 ふだんまじめに神を信仰していないのに、苦しみにあって、はじめて神に祈り始める。人はそれを「苦しい時の神頼み」と言うのですが、神は「苦しい時の神頼み」を軽蔑なさいません。むしろ、「あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい」ヤコブ 5:13 と言って、「苦しい時の神頼み」をするようにすすめておられます。私たちに起こされる「苦しみ」は人を痛めつけるだけのものではありません。そこから祈りが生まれ、信仰が芽生えます。「苦しみ」は回復への第一歩となるのです。

2. キリストは私たちの苦しみを分かっている。

「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。」詩篇 126:5 のみことばです。信仰者は、神にあっては苦しみが喜びに変わることを知っています。しかし、その苦しみがあまりに大きく深いと、人

からの慰めや励ましを素直に受け取れなくなってしまう、皮肉に聞こえてくることすらあります。それこそ「私の苦しみは神にさえ分からない」と思ってしまうことだってあるかも知れません。

しかし、本当に、神に分らない苦しみといったものがあるのでしょうか。いいえ、ありません。何故なら神は、人間の苦しみを高いところから眺めておられるだけのお方ではなく、人間とともに苦しんでくださるお方だからです。イスラエルはかつてエジプトで奴隷であり、さまざまな苦しみを通して、やっと自分たちの国を作りあげていきました。しかし、まわりの大きな国にいつも苦しめられました。神はそんなイスラエルの苦しみを見て知っておられただけでなく、彼らの苦しみ、痛みをご自分のものとして感じ取っていただきました。イザヤ 63:9 に「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた」とある通りです。神は、人間の痛みや苦しみを超えたところにおられて、それが分からないというではありません。腕組みして人間の苦しみを覚えておられるお方でもありません。聖書は、いと高い天におられる神は地上にいる人間の思いを知ってくださり、痛みや苦しみ、悲しみさえも感じ取ってくださるお方、いや人間とともに苦しんでくださるお方であると教えています。

私たちと共に苦しんでくださる神、このお方を、私たちはイエス・キリストに見ることができます。神の御子は人となって、人が味わうすべての苦しみ、痛み、悲しみを味わっていただきました。イエスは生まれる前から、また、生まれてすぐ後にも死の危険にさらされました。貧しい大工の子として育ち、ヨセフが亡くなったあとにはその手で一家の生計を立てるため、懸命に働きました。父なる神のみこころにしたがって宣教を始めると、たちまち反対が起こりました。故郷の人たちに追放され、会堂で教えることができず、野宿をしながら野外で説教を続けました。多くの弟子たちが去り、残った十二弟子でさえ、ひとりイエスを裏切り、他の弟子たちはイエスを見捨てました。理不尽な裁判によって有罪とされ、十字架に引き渡されたのです。

十字架は歴史上最も残酷な処刑です。それは肉体的苦しみはもちろん、精神的にもこれ以上のものがないほどに人を苦しめます。肉体的、精神的苦痛に加えて、イエスにとって最も大きな苦しみは「神から見捨てられる」ことにありました。イエスはあの十字架の上で人間の罪を背負い、その罪のために神の裁きを受けたのです。それまで神を「父」と呼び、神との交わりの中にあつた神の御子が、罪びととなって、神から見捨てられる、その苦しみをイエスは味あわれたのです。「お前のためならいつでも私のいのちを差し出せるよ」と言ってくれた父親から、「今後一切、私とお前とはつながりがないことにする。何故なら、あなたが罪人の代表だから」と言われたようなものです。誤解、喪失感、悲しみ、痛み、そういったことばでは間に合わないぐらいのショックをイエスは受けられました。神から見放された世界、それを、聖書は「地獄」と呼んでいます。イエスは十字架の上で、まさに地獄の苦しみを味わったのです。

ですからこのイエス・キリストが、私たちの苦しみを知らないはずはありません。コリント第一 10:13 に「あなたがたのあつた試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます」とあります。苦しむ者にとっての慰めのことばです。このことばの中に「あなたがたのあつた試練はみな人の知らないようなものではありません」とありますが、この「人」とは、イエスのことであると考えてよいでしょう。イエスの知らない試練、苦しみはありません。神が人となられ、人とともに苦しみ、それによって、人を苦しみから救ってくださる。ここにこそ、私たちの救いがあり、慰めがあるのです。

3. 価値あるキリストのための苦しみ

キリストは私たちのために苦しんでくださいました。そこに「苦しみの問題」への回答があるのです

が、聖書は同時に、キリストを信じる者たちに、キリストのために苦しむことも教えています。コロサイ 1:24 に「ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです」とあります。「あなたがたのために受ける痛み」というのは、パウロが福音を宣べ伝えたために牢につながれていることや、人々が正しい信仰を保つために、間違った教えと戦い、人々を教え続けていく労苦のことを言っています。人々が霊的に成長するため、また、そうした人々によって教会がキリストのからだとして成長していくためには大きな痛みが伴うのです。

パウロが教会のために苦しんだ痛みは同時に、キリストの痛みでもありました。パウロが「キリストの苦しみの欠けたところを満たしている」と言ったのは、キリストの十字架での痛みが不十分であったという意味ではありません。私たちの罪の負債はイエス・キリストの十字架によってすべて支払われました。キリストの十字架の痛みには何かをつけ加える必要はありません。ここで言われている「キリストの痛み」の「痛み」とは聖書の中で一度もキリストの十字架で受けられた痛みには用いられていません。さらにこの「痛み」は複数形が使われているのでただ一度の十字架の痛みを示すにはふさわしくないことばなのです。それでは「キリストの痛み」とは何かというなら 24 節の最後に「キリストのからだとは、教会のことです」とあるように教会と教会につながっているクリスチャンの痛みのことです。パウロがクリスチャンになる前、ユダヤ教徒としてクリスチャンを激しく迫害している時にダマスコへの道を急いでいた時に復活の主キリストは天からパウロにこう言われました。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」使徒 9:4 つまり教会と教会のクリスチャンを迫害することはイエス・キリストを迫害しているのだということです。パウロはこのことを通して、教会そして教会を作り上げている兄弟姉妹に対する姿勢が大きく変わりました。あのマザー・テレサが苦しむ人々の姿の中にキリストを見、キリストの姿の中に苦しむ人々を見たように教会で苦しんでいる兄弟姉妹を見る時に共に苦しんでおられるキリストを見るようになったのです。それは人の痛みを、たんなる人間的な同情からではなく、イエス・キリストの痛みを通して理解するようになったということです。これは大切な点です。あえて言うなら「同情」と「共感」との違いです。同情はやや上から視線で可哀そうにとりますが共感はその痛みが私に起こっていても何も不思議ではないし、痛みが無いのも私がちゃんとしているからではなくただ神の恵みと憐れみによるのであるという思いです。

そうするとそれを見た時に自分も何かをしようという気持ちになります。そのことをパウロは「キリストの苦しみの欠けたところを満たす」と言い、それはパウロは自分が苦しむことを通して満たしていると言いました。この場合の「満たす」とは「～に代わって満たし続ける」という意味のことばで、そこで受ける痛みは喜びでもあると言うのです。パウロはコロサイ教会の兄弟姉妹のために痛み続けます。そしてそれは私の喜びなのでも言います。なぜ、そんなことを言えるのでしょうか？ それは苦しんでいる教会を見る時同時にキリストと共に苦しんでいるということを見るからです。

またキリストの苦しみの欠けたところとは、具体的には、教会に欠けているもの、また教会が必要としていることとも言えます。私たちには何が欠け、私たちは何を必要としているのでしょうか。多くは霊的な、内面のものでしょうか。もしそれが祈りであるなら、信仰を持ち、忍耐を尽くして祈ることによって欠けを満たしたいと思います。それがみことばであるなら、ひとりびとりがキリストのことばを豊かに住まわせるために、何ができるかを考えて実行したいと思います。神の国はいつも求人難です。教会の奉仕にはいつも人が足りません。この欠けが満たされるように、キリストと痛みを共にしていきましょう。舟底に穴が空いているのを見つけた時に指摘するだけでは舟はやがて沈んでしまいます。あなたもキリストの苦しみの欠けたところを満たす者となることができるように祈ってゆきましょう。